

女子青年のアイデンティティ・ステイタスと 恋愛の葛藤対処様式との関連

The Relationship between Identity Status and Coping Strategies with Self-Conflict in A Romantic Relationship of Women Adolescence

文学研究科教育心理学専攻博士前期課程修了

中 川 久 子

Hisako Nakagawa

I. 問題

本研究は、女子青年の恋愛関係における自己内葛藤に対する対処様式と、アイデンティティ・ステイタスとの関連を検討することを目的としている。

はじめに、アイデンティティについて、アイデンティティ・ステイタスにも触れながらその概念について説明し、さらに、女性のアイデンティティがこれまでどのように論じられ、それがどのような影響をアイデンティティ理論に与えているのかについて述べることにする。そして、青年期の異性関係が、彼ら（彼女ら）にとってどのような役割を果たしているのかについても触れることにする。

1. アイデンティティについて

(1) アイデンティティとは

「アイデンティティ（自我同一性）」とは、Eriksonの発達理論の中心概念であり、発達心理学や青年心理学の分野を超え、青年を捉える概念として広く注目されてきた。以下、その概念の定義を踏まえながら、諸特徴を述べることにする。

①心理・社会的発達理論として発達理論

アイデンティティとは「自己の存在証明¹⁾、自分とは何者であるかという自己定義、あるいは自分自身はこの社会の中でこう生きているのだという実感、存在意義²⁾」などと定義されている。

Eriksonはその著書「幼児期と社会」³⁾でその概念について次のように述べている。

「自我同一性の観念は、過去において、準備された内的な斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) とが、他人に対する自分の存在の意味—「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味—の斉一性と連続性に一致すると思う自信の積み重ねである。」としている。

つまり、アイデンティティの概念は「内的な斉一性と連続性」という心理的な側面と、「他人に対す

る自分の存在の意味の斉一性と連続性」という社会的・対人的な側面において、人生の様々な重要な問題、たとえば「職業」「価値観」などにおいて、自らの自己定義を主体的に確立していくものであるといえる。Eriksonはこのように人間を「身体的・心理的・社会的」な存在であると考え、それらを包括した発達論をとらえている、この点がそれまでのフロイトを中心とした心理・性的発達論と異なる点であろう。

②発達論における危機の概念

また、アイデンティティの概念の発達理論には、「危機」という概念が重要な位置を占めている。青年期におけるアイデンティティの危機について山本は以下のように述べている。

「児童期までの同一化の成果として「これが、自分だ」と思っていたこと、「これでいいのだ」と漠然と思っていたことが他者にとって、あるいはその「時代」の求める理想像に照らして、意味をなさず、認められないとするなら、これはまさに同一性（アイデンティティ）の危機である。そこで、自分というものを、仲間や社会が認めてくれる方向に一致させながら自信を得ていかなければ生き生きとした自分を取り戻すことができない。このように自我の側面と社会の側面とが深くからまり合い、意識化する点に青年期以後の同一性確立の特徴がある⁴⁾。」

つまり、アイデンティティの確立は、個人が自分自身の心理—社会的位置づけを模索期間において、役割実験や、危機を経た上で自覚的に形成されていくものでありとらえられる。

（2）現代の青年期におけるアイデンティティの概念の意義

以上、Eriksonのアイデンティティの概念について述べてきたが、ここで改めて、現代の青年期をとらえるうえでのアイデンティティの概念の有用性、意義について述べたい。

現代における青年について、「スチューデント・アパシー」・「フリーター」の増加、「ニート」(NEET ; Not in Employment, Education or Training) や「パラサイトシングル」など、いわゆる「自立」という局面から青年の問題について語られることが多い。また、福島は現代の青年は、模索期間をうまく避け「もっとスマート」に青年時代を通過すると述べ⁵⁾、青年期が「葛藤・模索」をする発達の時期であるというEriksonの発達理論の前提に対して、疑問を投げかけている。

改めて現代の青年にとってのアイデンティティの意義を考えるために、青年がおかれている、もしくはおかれてきた時代的背景として1990年代を振り返ってみると、世界的にはポスト冷戦と呼ばれ、アメリカナイゼーションともいわれたグローバル化が進んだ時代である。世界の各地で、まるでアイデンティティ・クライシスの表現のような民族紛争やテロも勃発し続けた。日本ではバブルが崩壊し、戦後を支えてきたいわゆる高度資本主義社会がいきづまり、年功序列制度、終身雇用制の揺らぎやそれに伴う親世代の「リストラ」、一方では男女雇用機会均等法など選択の自由化や就職や結婚に関する価値観も多様化し、青年は「確固たるモデル」がないまま90年代の混迷と多様化の時代を生き抜いてきたともいえるだろう。

多様なライフスタイルが可能となったがゆえに、予め用意されているルールにのっていきような選

択は難しく、現代の青年は非常に自己決定が困難な時代を生きているといえよう。

筆者はこの自己決定の困難さこそが、現代の青年をとらえる上でのアイデンティティの概念を用いる意義ではないかと認識している。アイデンティティという概念を用い実態にアプローチすることで、「自立が困難」に見えたり、もしくは適応的で要領よく「スマート」に見える現代の青年の成長や葛藤を浮彫りにできるのではないかと。

(3) アイデンティティ研究における先行研究の概観

筆者は上述したように青年期をとらえる上で、アイデンティティは非常に有用な概念であると考えますが、一方でそれを実証的に研究することはなかなか困難であると思う。

従来、アイデンティティに関する研究の多くは、それが達成された時に生起すると考えられる特徴を測度としたり⁶⁾、個人のアイデンティティの状態を尺度（質問紙）によってとらえようという試みがなされてきた⁷⁾。しかしこれらはアイデンティティを間接的・1次元的であるとし、個人のアイデンティティが成立するプロセスや基準が、明確にとらえられないという問題点を残してきている。Marciaは、このような質問紙を主とするアイデンティティの自己評定法に満足できず、次項に述べるアイデンティティ・ステイタス・アプローチを提案した。

2. Marcia (1966) によるアイデンティティ・ステイタス・アプローチ

(1) アイデンティティ・ステイタスについて

Marciaは、エリクソンの理論における「危機 (crisis)」の概念を重要視し、個人のアイデンティティの状態を客観的、操作的に把握しようとアイデンティティ・ステイタス（同一性地位）という考え方を提唱した。それは、個人のアイデンティティを、自分自身の職業、価値などについて思い悩み選択に苦慮する「危機 (crisis)」と、決定された自分のあり方・進路について傾倒する「傾倒 (commitment)」の2つの変数から4つのステイタスに類型するものである。

表1：アイデンティティ・ステイタス⁸⁾

アイデンティティ・ステイタス		危機	傾倒
アイデンティティ達成 (Identity Achiever)		すでに経験した	している
モラトリアム (Moratorium)		現在、経験している	あいまいである、あるいは積極的に傾倒しようとしている
早期完了 (Foreclosure)		経験していない	している
アイデンティティ拡散 (Identity Diffusion)	危機前 (Pre-crisis) 拡散 (Diffusion)	経験していない	していない
	危機後 (Post-crisis) 拡散 (Diffusion)	すでに経験した	していない

すなわち、危機の有無・傾倒の有無により

①「アイデンティティ達成群」（以下**A群**と略す）危機の時期をすでに経験し模索した結果、一つの生き方に対して主体的に選択して、それに積極的に関与している状態である。

この型から受ける印象は、自ら選択した物事を「やりとげる」ことができるように感じられることである。

②「早期完了群」（以下**F群**と略す）明白な危機を経ず周囲の価値観をそのまま継承し、これに傾倒している状態。自分の目標と両親またはそれに準ずるものの目標との間に不協和がなく、すべての体験が幼児期以来の自分の信念を補強するだけになっている。この型はある種の「硬さ」（融通のきかなさ）が特徴的である。このタイプのもっとも大きな特徴は、意志決定期間（危機）が明確にみられないことである。

③「モラトリアム群」（以下**M群**と略す）危機の最中で自己決定の模索をしながら傾倒する対象を見つけだそうとしている状態。傾倒の程度は曖昧で焦点化されていない。しかし自己選択にあたって一生懸命努力、奮闘しているところが特徴である。

④「アイデンティティ拡散群」（以下**D群**と略す）危機を経験したかどうかにかかわらず、傾倒すべき対象を持たず自分の生き方がわからなくなっている状態である。第一の下位型である危機前拡散型は、今まで自分が本当に何者かであった経験がないため、何者かである自分を想像することが困難であるという人であり、第二の下位型は、「傾倒をしないことに傾倒している」という危機後拡散型である。アイデンティティ・ステイタスは、以上の4つに類型されるものである。

（2）アイデンティティ・ステイタス・アプローチによる先行研究の概観

Marciaが発案したアイデンティティ・ステイタス・アプローチの方法論に基づき行われた初期の研究は、Marciaをはじめとして⁹⁾、アイデンティティ・ステイタスと他の変数との関連性を検討し、アイデンティティ・ステイタスそのものの確定を目指したものが多い。

アイデンティティ・ステイタスとパーソナリティに関連する初期の先行研究を中心に概観すると、特徴として男子学生はA群において、不安・自己評価・自尊感情、権威主義的態度の諸側面において望ましい結果を得ており、A群、M群が類似している傾向にあることが導出されている。他方、女性においては、危機は否定的な意味を持つ場合が多いと考えられ、F群はM群より適応的であるという知見が見出されていた。

しかし、その後のMarciaの概念を取り入れたアイデンティティ・ステイタスを評定する質問紙による研究では、M群の肯定的な面が浮き彫りにされる研究結果も存在し¹⁰⁾、女性においてM群、F群のどちらが女性の発達にとって意味があるかどうかは一概には結論づけることはできないとされている。即ち、女性の発達においては男性のそれよりも複雑であるという共通理解がなされ、女性のアイデンティティの形成過程について注目がなされていたのである。

3. 女性のアイデンティティの形成について

初期のアイデンティティ研究では、Eriksonの青年期の発達・病理の研究¹¹⁾や、Marciaのアイデンティティ・ステータス研究¹²⁾に代表されるように、男性を対象とした個としての発達の側面を中心に研究が進められてきた。それに対して、今までのアイデンティティをとらえていた視点は、女性の発達の理論を十分に考慮していないのではないか、という声があがったのである。この時期に行われた一連の研究によって、男性のアイデンティティにおいては職業などの「個人内領域」、女性においては性役割などの「対人関係領域」が重要であるという二分法的にとらえる理解の図式ができあがった。

4. アイデンティティにおける「関係」の視点

(1) アイデンティティにおける「関係」の視点

しかしながら、アイデンティティ形成における性差を、領域を分けることによって検討しようとした実証的研究の結果からはこのような図式を支持するものも支持しないものも得られ、一様ではなかった。また、1970年代から1980年代にかけての女性解放運動による社会情勢の変化は女性のライフサイクル、特に職業を持つことについての価値観を大きく変化させた。こうした時代の変化の中、「女性も男性と同様に職業をもつことが一般的になり、社会においても家庭においても両者が同じ役割を担うようになったのである。その結果、領域の区別はしだいに批判の対象となってきた。」という時代潮流がある¹³⁾。

つまり、アイデンティティにおける「関係性」は、自我を確立するために不可欠である¹⁴⁾し、重要な他者との関係における葛藤体験にいかに関与するかということが、アイデンティティの形成に重要な鍵である¹⁵⁾のは性別を問わず共通していると主張されるようになったのである。

(2) 女性の発達をとらえる上での関係の視点

上記で、アイデンティティの確立において関係性の視点が男女ともに重要な視点になってきたことについて述べた。現代において、分離一個体化＝男性、関係性＝女性という単純な区分けをする意味はうすれたといえよう。それを踏まえた上でここではもう一度、女性の発達を「関係性」からとらえる重要性や意義を述べたい。

無藤¹⁶⁾は、「他者へのケアリングを大切に感じて実践することと、自己確立・自己主張・自己実現との折り合いをどうつけるかは、青年期の（特に女性に多く見られる）課題でもある。」と、アイデンティティの探求において他者との関係性の葛藤が女性にとってより多くみられる経験であると示唆している。筆者は、「女性は関係の中で発達が促される」という本質論的、生物学的な見方に立つものではないが、特に現代の女性は、法律的には「選択の自由」が可能でありながらも、関係における期待や責任が女性に求められることが依然として多く、より「関係性」から生じる葛藤が男性のそれよりも複雑で自己決定が難しいのではないかと考える。女性は男性よりも、他者との関係の中で自己のとらえなおしをする機会が多いというのは事実ではないかと考えるものである。

5. 青年期における恋愛関係

また、本研究では青年期における恋愛関係に注目した。青年期にとって異性との関係というものはどういった意味があるのだろうか。これまで、発達心理学の立場からも、両親以外の異性との安定、成熟した対人関係の確立を、青年期における「発達課題」の一つとして注目してきている¹⁷⁾。異性との相互作用は、性役割行動を確立し、家庭・両親からの分離を促すなどの点で、独特の発達の意義を持っているものと考えられている。日本においては、宮下¹⁸⁾や、富重¹⁹⁾などが、その発達の意義の重要性を強調して述べている。

しかし、このように青年期における恋愛関係の発達の意義が注目されながらも、青年期の対人関係と心理的変数との関連を扱った研究を概観すると、これまでは友人関係や家族関係のみを取り上げたものが大半であり、恋愛関係を取り扱った実証的な研究は少ない。この点からもこの主題を取り上げる意義があると考えたものである。

II. 目的

本研究の目的は、女子青年の恋愛関係における自己内葛藤に対する対処様式と、アイデンティティ・ステイタスとの関連を検討することである。

問題意識として筆者が最初に考えたのは、恋愛関係にある女性が、その相手との関係において葛藤を抱えたときにとる対処の仕方というのは、その本人の自己決定の仕方や特性になんらかの関連があるのではないだろうか、というものであった。

1. 青年期の恋愛関係における葛藤に注目する意義

特に青年期の恋愛関係の葛藤に注目したのは以下の理由による。

(1) Eriksonの心理社会発達モデルにおける「親密性 (Intimacy)」

Eriksonはアイデンティティ達成の次の心理・社会的発達課題として、「親密性」を挙げている。Erikson²⁰⁾の定義によると「親密性」とは「自己を具体的な提携や協力関係に傾倒させ、たとえそれが有意な犠牲や妥協を必要としても、そのような傾倒を持続する、倫理的強さを現す能力」としている。

Orlofsky²¹⁾は親密性をEriksonの理論から抽出した3つの基準により、操作的な定義を試み、アイデンティティの達成と親密性の獲得の関係についての検討を行っているが、これらは男子学生を対象にしたものであり、女性における両者の関連については男性と異なる点があることも指摘されている。アイデンティティ達成と親密性の獲得との関係についてはその後も様々な研究が進められてきている²²⁾²³⁾²⁴⁾。このような知見を踏まえ、青年期の異性関係をとりあげることにした。

(2) 現代青年の恋愛規範・性行動の変容・多様化

また現代の青年の恋愛・性行動については、親世代と比べ、援助交際が社会問題化するなど激しい変化が起きているといえよう。実際行動の一例として、大学生の性交渉の経験率が、99年においては、74年と比較してみると女性においては5倍の変化がある²⁵⁾。

しかし、このようなリベラルな変化がある一方で、性規範について女性にはモラルやジェンダーの縛りが男性より強いことがデータによりわかっており、恋愛関係における行動（特に性行動）においては女性は今もなお受身的な行動をとることが多い。たとえば、上述の1999年の日本性教育協会調査では性行動におけるイニシアチブを男女のいずれがとるかについての回答を1993年度のものと比較しているが、男女のパターンが旧来とまったく変わっていないことが抽出されている。青年にとっての恋愛関係の意味は問題5でも述べたが、これは世代間、男女間においてはもちろん、個人内においても、規範や行動についてはリベラルに変化した部分と変わらず保守的な部分が入り混じり、一元的にはいえない様相をあらわしているといえる。青年の恋愛関係というのは現在このように価値が変化、多様化しており、性行動や相手とどのような関係を持つかについて、以前よりも個人差が大きいのではないかと推察される。

2. 女子青年の恋愛関係における自己内葛藤に注目する意義

さて、ここでは女子青年の自己内葛藤を取り扱う意義について述べたい。「重要な他者との関係における葛藤体験にいかに関与するかということが、アイデンティティの形成に重要な鍵である」という永田²⁶⁾の弁を借りれば、最も身近な他者といえる恋人とのなかで起こる葛藤が、女性にとって重要な意味を持つことは十分に推測される。なお、ここで注目する「葛藤」であるが、心理学で取り上げる葛藤には、個人内葛藤と社会的葛藤に大きく分けられる。個人内葛藤とは、「複数の相互排他の要求が同じ強度をもって同時に存在し、どの要求に応じた行動をとるかの選択ができずにいる状態²⁷⁾」を指す。一方、社会的葛藤とは、「複数の個人や集団、また組織や国家の間で対立する目標も持つために、利害の対立や緊張状態にある状況」を指す。今まで、他者との関係における葛藤を取り上げる際はこの後者の社会的葛藤、つまり対人間で生じる意見や視点の食い違いによる葛藤などに着眼点が置かれてきたものが当然多く、自己内での葛藤については関係との文脈からは比較的切り離された形で研究されることが多かった。

しかし、本研究では特に、個人内葛藤、つまり自己内葛藤に焦点をあてている。以下、青年期の女性の恋愛関係において、自己内葛藤に筆者が着眼した理由を3点にわたって以下に述べたい。

(1) 女性にとっての関係性の重要性

問題4でも述べたように、他者との関係に男性より深くコミットしやすいとされる女性においては、他者との関係において、自らの欲求について内的な葛藤が生じる機会が多いと思われる。「私はこう望んでいるが、相手は私の望みと相容れないことを主張する」という対人間において生ずる葛藤の構図だけではなく、女性は関係における規範や、前述したように期待（ケア・関係調整など）や責任を社

会的役割としてより多く背負いやすい分、相手の主張にかかわらず、関係において「この行動や要求は果たしてこれでいいのだろうか」という、自身の価値観や行動に対する個人内での葛藤が生じる機会が多いのではないかと考えられる。

(2) 社会・時代の恋愛・性規範の多様化

また、前項で、規範や行動については特に女性においてリベラルに変化した部分と変わらず保守的な部分が混沌としていると述べた。このように価値観やモラルが多様化しているからこそ、女性が関係においての行動や価値観を自身で選択しなければならないという必要性が高まり、自己内で基準の変容を迫られるような葛藤も経験しやすいのではと考える。特に近代の恋愛や性におけるルールは、女性に対するものが多い。近代の純潔教育の影響が強い親、教師から教育を受けてきた現代の女性は、恋愛関係で生じる様々な感情、欲求を主観的に体験することを抑圧してきたかもしれない。しかし、青年期における自らの実際の恋愛関係における欲求や行動を通して、自らの価値観や自己像などについて再検討を迫られる機会が多いのではないだろうか。

(3) 本学の学生

また筆者の主観ではあるが、本学の学生においては、恋愛についての自己内葛藤が多く存在し、その中でもそれが特に女性に多く見受けられるのではないかと筆者はこれまで日々、実感として感じてきている。たとえば、筆者の友人間で日常的に交わされる悩みや会話の中に「今は恋愛をするべきなのだろうか」「異性と交際することによって、学生時代の大事な時期が無駄にならないだろうか」と自己内で葛藤する者が少なくなかったように思われる。その理由については、本学は私学であり、ひとつの宗教を信仰しているものが多く存在し、なおかつ信仰やそれにもなう活動などを生活の基盤としている者も少なからず存在することが挙げられよう。信仰と恋愛は相容れないものではない。ただ、信仰の活動にウエイトが大きい者は、その活動と恋愛との間で葛藤が生じやすいかもしれない。さらに筆者の経験として同じような葛藤をする者の中でも、その自己内葛藤を自己の振り返りに使い、肯定的な経験としてとらえている者と、自分にとって思い出したくないような経験として否定的にとらえる者がおり、両者の違いはいったいどういうことと関係しているのだろうか考えた。こういった問題意識もまた、本研究の主題の設定の動因となっている。

(1) 女性にとっての関係の重要性 (2) 時代の性規範の多様化という要因に加え、本学では上記のような背景がさらに加味されて、女子学生は恋愛における個人内葛藤が多く存在するのではないかと考えられる。

以上、このような3点の理由から、筆者は本学において女子青年の恋愛関係における自己内葛藤に注目する意義があると考えた。女性が恋愛関係における自己内の葛藤が前述したような理由で多い分、恋愛の個人内葛藤をどのように対処していくのかという問題に直面することが女性のアイデンティティの形成とより深く結びついているのではないかと、筆者はそう考えたのである。そして、この両者の関連を考察することで、女性のアイデンティティ形成プロセスの検討が可能と考えた。

最後に、本研究での自己内葛藤をあらためてここで定義すると、「これまで拠り所としてきた規範・価値観と、自分の現在の欲求・感情・考え方ならびに自分が実際している行動との間になんらかの食い違いが生じ、拮抗している状態」となる。

以上、女性のアイデンティティについて「関係性」という概念をキーワードとして、その中でも女子青年の恋愛関係における自己内葛藤をとりあげることについての意義について論じた。

3. Berzonsky (1989) のアイデンティティスタイル

それでは実際に、自己内葛藤についてどのようにアプローチしていくかの方法論であるが、それについて参考にした先行研究を紹介する。

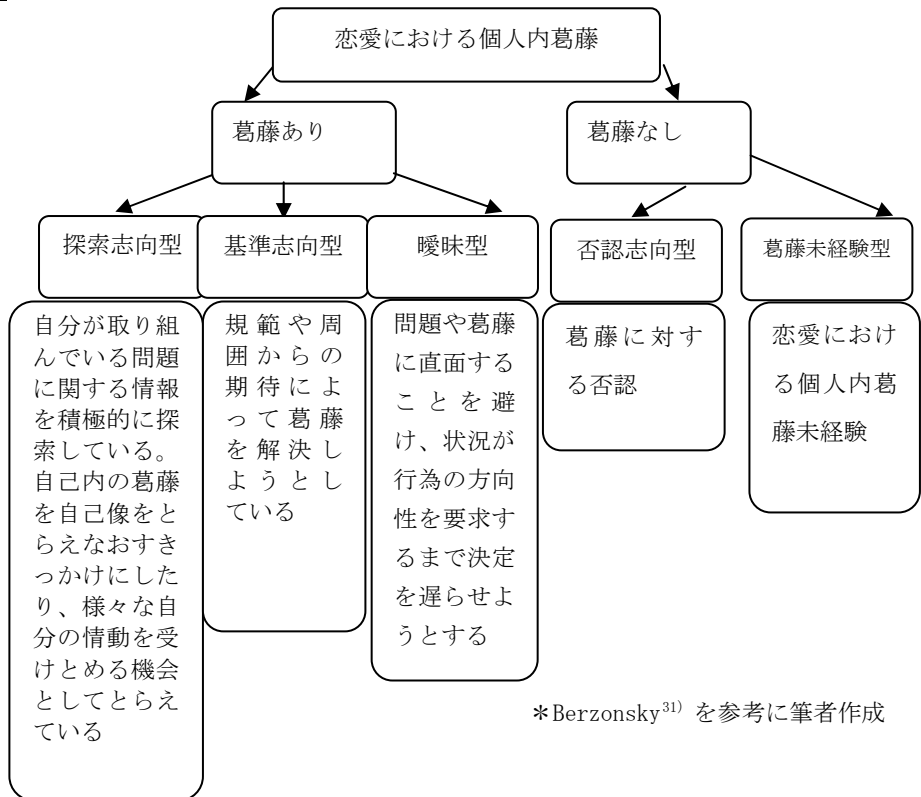
本研究では対処様式をとらえるために、Berzonskyのモデルを参考にしている。Berzonsky²⁸⁾は Marciaのアイデンティティ・ステータスを認知(情報処理)の差異からとらえ直し、その情報処理のスタイルを3種類(情報志向・基準志向・曖昧志向)に分け、そのスタイルとアイデンティティ・ステータスとの関連を研究している。

ちなみに情報処理のスタイルについて簡単に説明すると、以下のとおりである。

- ① 情報志向 (Information Orientation)・・・自分が取り組んでいる問題に関する情報を積極的に探索し明細化し、評価する。
- ② 基準志向 (Normative Orientation)・・・規範や周囲からの期待によって問題を解決する。
- ③ 曖昧志向 (Diffuse/Avoidant Orientation)・・・問題や葛藤に直面することを避け、状況が行為の方向性を要求するまで決定を遅らせようとする。

このように、Berzonskyは認知的な観点からこのモデルを考案したのであるが、本研究では恋愛における自己内葛藤について特に注目するため、認知的な側面だけではなく、情動的な側面もとらえたいと考え、若干修正を加えることにした。また、葛藤が想起されない場合、ネガティブな出来事を経験していないのか、想起を回避しているのかを区別することも必要であろう²⁹⁾。そこで、葛藤が語れない場合は、否認志向型と葛藤未解決型のいずれかに類型することにした。本研究では、Berzonsky³⁰⁾のモデルを参考に、葛藤の対処様式について、**図1**のようなモデルでとらえていくこととした。

図 1.



4. 目的および仮説

本研究では、青年期の女子学生が恋愛関係において自己内で葛藤を持つであろうと想定し、その葛藤に対してどのように対処しているのかを類型することにより、葛藤対処様式とアイデンティティ・ステータスとの関連を検討する。

具体的な目的は、

1. 女子青年が恋愛関係において自己内の葛藤を経験しているのかどうかを検討する。
2. 女子青年が恋愛関係において自己内の葛藤を経験しているのならば、葛藤に対してどのように対処しているのかを類型する
3. 2. で類型した葛藤対処様式と、女子青年のアイデンティティ・ステータスとの関連を検討する

仮説として

1. 女子青年の恋愛関係において自己内葛藤が存在するのではない
2. 自己内の葛藤対処とアイデンティティ・ステータスとの関連は以下になるだろう。葛藤が存在するものは

- ① 探索志向型……自分が取り組んでいる問題に関する情報を積極的に探索している。
自己内の葛藤を自分の自己像をとらえなおすきっかけとしてとらえたり、様々な自分の情動を受けとめたりする機会としてとらえる
- ② 基準志向型……規範や周囲からの期待によって葛藤を解決する
- ③ 曖昧型³²⁾……問題や葛藤に直面することを避け、状況が行為の方向性を要求するまで決定を遅らせようとする

に類型化されるが、探索志向型はアイデンティティ・ステータスのA群、M群と、基準志向型はF群と、曖昧型はD群と関連するだろう。

また葛藤が存在しない者は、①葛藤未経験型と②否認志向型に分かれるが、特に②の否認の対処をとるものは、F群に多く見られるであろう。以上が仮説である。

Ⅲ. 予備調査

1. 予備調査①

面接調査を進めていく上で、本学において恋愛における個人内での葛藤が本当に存在するのか、そして、それは特に女子学生に多く見られるのかどうかについて、事前に知る必要があると思われた。

そこで、個人内葛藤が特に女子学生に存在するのかどうか調べるために予備調査を行った。特に目的2で述べたように、本学においては「恋愛することは自分の成長を妨げるのでは」という個人内葛藤が強いという印象があったため、そのような自己内葛藤が存在するのかどうか独自に作成した質問紙を用いて調査した。

その結果、本学では女性のほうが男性に比べ、「恋愛することは成長や信仰心を妨げるかもしれない」と考えたり悩んだりする傾向が見出された。

これで予備調査において、本学では恋愛における自己内葛藤が存在し、しかも、「恋愛することは成長を妨げるかもしれない」と女性のほうが予想通り男性に比べ、自己内で葛藤するという傾向が確かめられた。

2. 予備調査②

本研究はアイデンティティ・ステータスと、自己内葛藤対処様式との関連に関する研究であり、本調査の対象者は母集団の属性を忠実に反映するようなランダムサンプリングによるものではない。とはいえ、どのような母集団を対象に理論的サンプリングを行ったのか、基礎資料として今回の研究における母集団のアイデンティティ・ステータスの分布を、加藤³³⁾の自我同一性尺度を使って特定した。

本研究は、女性のみを実施されたものであるが、加藤の研究においてはアイデンティティ・ステータスの分布に性差は見られないとしており、比較に問題はないと考えられる。本研究の分布の割合と

加藤³⁴⁾の分布の割合とを比較すると、Fが5%以下と少ないこと、Mが10%台、D - M中間が最も多数を占めることの3点で、ほぼ同じ傾向が認められた。しかし、Aは21%、A - F中間が28%と増加していること、Dが認められなかったこと(0%)に違いが認められた。つまり、本研究の母集団は、加藤の研究における大学生の一般の傾向と比べて、AやA - F群の割合が大きく、D地位が少ない傾向が示された。

IV. 本調査

1. 目的

女子青年のアイデンティティ・ステイタスと恋愛の葛藤対処様式はどのように関連するのか、このことについて調査する。

2. 面接調査の意義と判定方法

本調査では、アイデンティティ・ステイタスや恋愛の葛藤対処様式の判定に面接法を採用した。ここでは面接調査を研究方法として用いた意義ならびに、各判定の基準について述べていく。

(1) 面接法の意義・意図

本研究は仮説検証型ではあるが、統計手段を用いるいわゆる定量的な研究ではなく、面接調査による質的検討を行っている。

面接調査(主に非構造化面接法)の利点は一般に、コミュニケーションの正確性・臨機応変性・包括性・情報の多様性と豊かさ³⁵⁾などがあげられるが、今回特に面接調査を採用したのは、今回の研究が、静的な現在の状態に注目するのではなく、面接法の利点が生きてくる変化プロセスに重きをおいているからである。

アイデンティティ・ステイタスと葛藤対処様式の各々について面接法を用い、その上でこれからの関連性について質的調査として検討するという手続きをとることにした。

(2) Marciaのアイデンティティ・ステイタス・アプローチの評定方法

個人のアイデンティティ・ステイタスの評定方法について述べる。アイデンティティ・ステイタス・アプローチの目的は、個人のアイデンティティ・ステイタスを決定することにある。アイデンティティ・ステイタスは、青年が直面すると考えられる人生の危機への対処の仕方の様式を示す。4つのアイデンティティ・ステイタス、即ちアイデンティティ達成(A)・モラトリアム(M)・早期完了(F)・アイデンティティ拡散(D)に分類していく。

アイデンティティ・ステイタスを決定する2つの基準は問題で述べたとおり、①危機(Crisis)と②傾倒(Commitment)である。今回は職業・価値観の2領域において「危機」と「傾倒」を査定し、アイデンティティ・ステイタスを判定していく。

(3) 恋愛の自己内葛藤対処様式の評定方法

恋愛の自己内葛藤対処様式については第2章で述べたように、Berzonskyのモデルを参考にして筆者が作成した。恋愛の自己内葛藤対処様式についての面接は、葛藤の対処様式の類型を決定するためである。5つの類型は、探索志向型・基準志向型・曖昧型・否認志向型・未経験型である。

(4) 自我同一性地位・恋愛の葛藤対処様式の評定における信頼性

評定に際しては、副評定者（評定熟練者）にも独立に筆者の逐語録をもとに評定を試みってもらうように依頼し、筆者を含めた2者の評定一致率によって評定の信頼性を検討することにした。自我同一性地位評定において副評定者が使用するマニュアルは、筆者の使用するマニュアルと同一である。その結果、7割以上の一致率をみたので、評定の信頼性に関して一応の満足を得られたとした。

3. 方法

(1) 被面接者について

現在異性と交際中である、創価大学女子学生26名³⁶⁾

(2) 実施方法・手続きについて

- i) 調査場所：S大学内の心理教育相談室、教育学部棟の空き教室など、全て個室で行った。
- ii) 調査時期：8月中旬～11月
- iii) 平均調査時間：およそ60～80分で、長くて2時間半であった。
- iv) 実施手続き：被面接者には「女子学生のアイデンティティと恋愛」における調査をしている旨を伝え、面接を依頼した。面接の詳細を記述するために、被面接者の了承を得て、レコーダーに録音し逐語録を作成した。その際、プライバシーの保護には厳重な注意を払うこと、面接内容を論文に記載する際は、本人が特定されないような方法をとることを相手に伝え、了解を得るようにした。

4. 結果

(1) 被面接者のプロフィール

以下に、本調査における被調査者のプロフィール一覧を示す。

調査時の年齢は19歳～22歳で、平均年齢は21.0歳であった。

アイデンティティ・ステイタス・アプローチにおいて職業の領域について質問を行うため、職業についてまだ意識が低いと思われる1年生は対象にせず、2年生以上を対象とした。学年の内訳は2年生5名、3年生8名、4年生13名であった。

(2) アイデンティティ・ステイタスについて

アイデンティティ・ステイタスの結果ならびに度数分布は表2のとおりである。

表2：アイデンティティ・ステータスの結果ならびに度数分布

領域 \ 地位	A	M	F	D	合計
職 業	0(0%)	8(31%)	16(62%)	2(8%)	26(100%)
価 値 観	0(0%)	1(4%)	25(96%)	0(0%)	26(100%)
全 体	0(0%)	6(23%)	18(69%)	2(9%)	26(100%)

各アイデンティティ・ステータスの葛藤対処様式を見るため理論的サンプリングを試みたが、総合評定（表2では全体と記）で、A（アイデンティティ達成）群と評定された者がおらず（0名、0%）、D（アイデンティティ拡散）群と評定された者もごく少数（2名、9%）であった。逆にF（早期完了）群と評定された者が非常に多く（18名、69%）ついてM（モラトリアム）群がやや多く（6名、31%）見られた。このような結果になった理由として、まず一部質問紙により予想された評定が、実際の半構造化面接による評定と違ったりしたことなどがあげられる。さらに、本面接はランダムサンプリングではなく、対象者も少ないので一概には言えないが、母集団の属性による影響を大きく受けたのではないかとと思われる。

（3）恋愛における自己内葛藤対処様式について

①葛藤の存在について

次に、現在交際中の異性との間で葛藤が存在したかどうかの結果ならびに度数分布を表3のとおりである。予備調査（第3章の2）では、現在、過去どちらかで葛藤を感じた経験があると答えたのは、131名（63%）であったが、今回の面接調査では17名（65%）で、それをほぼ支持するような結果となった。現在異性と交際中の女性に限っても、交際の中で恋愛における自己内葛藤を感じるものが6割半存在するということがいえる。これはほぼ仮説1「女子青年の恋愛関係において自己内葛藤が存在するのではないか」を支持するような結果となったといっていよう。

表3：葛藤の有無についての結果ならびに度数分布

葛藤あり	葛藤なし	計
17 (65%)	9 (35%)	26 (100%)

②葛藤対処様式について

また、恋愛の自己内葛藤対処様式についての結果ならびに度数分布は表4のとおりである。葛藤が存在すると答えたものは、探索志向型（23%）と基準志向型（31%）に分かれ、曖昧型（12%）の対処スタイルをとるものは少数であった。

表4：恋愛の自己内葛藤対処様式についての結果ならびに度数分布

探索志向型	基準志向型	曖昧型	否認志向型	未経験型	計
6 (23%)	8 (31%)	3 (12%)	4 (15%)	5 (19%)	26 (100%)

(4) アイデンティティ・ステータスと恋愛の自己内葛藤対処様式との関連

次に、アイデンティティ・ステータスと、恋愛の自己内葛藤対処様式を組み合わせると、どのような結果になるか、そのクロス表を表5に示す。

表5:アイデンティティ・ステータスと葛藤対処様式のクロス表

	探索志向型	基準志向型	曖昧型	否認志向型	未経験型	計
A	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
M	5 (19%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (4%)	6 (23%)
F	1 (4%)	8 (31%)	2 (8%)	3 (12%)	4 (15%)	18 (69%)
D	0 (0%)	0 (0%)	1 (4%)	1 (4%)	0 (0%)	2 (8%)

さらに、各アイデンティティ・ステータスと恋愛の自己内葛藤対処様式を組み合わせるとどのような度数分布になるか、そのクロス表を表6, 7, 8に表した。(A群は今回被面接者にいなかったため、結果より省いている。)

2変数(アイデンティティ・ステータス、恋愛における自己内葛藤対処様式)についてのクロス表に基づき、2変数間に関連があるかどうかを χ^2 検定することにより、仮説の検証を試みたかったが、今回の研究では各ステータスの調査数の偏りが多く、A・D・M群において予定人数が満たなかったため、統計的に関連を見ることはイエーツの補正を用いても難しいことが予測された。A群の存在がみられず、F群の存在が多数を占めたことは、また違った研究的意義があるとも思われるが、本研究においては統計的にアイデンティティ・ステータスと恋愛葛藤対処様式との関連をみることは諦めざるを得なかった。

表6：モラトリアム群(M) と 恋愛葛藤対処様式 のクロス表

	探索志向型	規範志向型	曖昧型	否認志向型	未経験型	計
M	5 (83%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (17%)	6 (100%)

表6の結果、M群5人(83%)が探索志向型の対処スタイルをとっていることが確認された。また規範志向型・曖昧型・否認志向型の対処スタイルをとるものは存在せず(0人、0%)、未経験型が1人(17%)いるのみであった。

統計的に有意な結果であるかどうかは残念ながら述べるできないものの、M群と恋愛における自己内葛藤対処様式の探索志向型との間に関連がある傾向が示され、仮説2を支持する結果となっ

た。

表7：早期完了群（F） と 恋愛葛藤対処様式 のクロス表

	探索志向型	規範志向型	曖昧型	否認志向型	未経験型	計
F	1(5%)	8(44%)	2(11%)	3(17%)	4(22%)	18(100%)

表7の結果、F群に一番多くみられた葛藤対処様式は基準志向型であり（8人、44%）、これも仮説2を支持するものであった。基準志向型の次に多くとられている対処方法は、未経験型、否認志向型、であった。探索志向型・曖昧型は、共に2人（11%）であった。

表8：アイデンティティ拡散群（D） と 恋愛葛藤対処様式 のクロス表

	探索志向型	規範志向型	曖昧型	否認志向型	未経験型	計
D	0(0%)	0(0%)	1(50%)	1(50%)	0(0%)	2(100%)

D群に判定された者自体が少ない（2名）が、探索志向型、規範志向型、未経験型の対処は見られず、曖昧型・否認志向型に対処が分かれた。

V. 考察

本研究では統計的検定はほどこせなかったものの、異性と交際関係にある女子青年の恋愛葛藤対処様式が、アイデンティティ・ステイタスと関連する傾向にあることが見出された。この結果は、女子青年が恋愛関係における自己内での葛藤を対処するスタイルには、アイデンティティの探求への態度が関与していることを示唆するものであると総括しうる。

（1）アイデンティティ・ステイタスについて

なるべく各アイデンティティ・ステイタスの被調査書に面接を試みたいと思い、質問紙を事前に使い被面接者を選別するなどの工夫を行ったが、ステイタスの総合評定の結果としてA群が存在せず、F群が非常に多数を占める（69%）というようなかなり偏りのある結果となった。また価値観ではほぼ全員（96%）の評定がFであり、「今ここで考えてみたが」と前置きをつけながら回答した者も少なくなかった。

ランダムサンプリングではないにもかかわらず、このように偏りがみえた理由として以下のことが考えられよう。

①職業について

職業においてF群が多く（62%）見られた。一般企業への就職希望者（4年生の一般企業希望者6名のうち就職内定者4名）においては、就職困難による選択肢のなさからくるとされる消極的な決定や、就職先に先輩が多いという「安心による選択」のようなものも見受けられた。法的に職業選択が自由になったとはいえ、近年就職難が続き、女子学生にとって「就職内定」を勝ち取るのはなかなか

か容易ではない。進路選択については専門職を考えない一般企業への就職であれば、手当たりしだい何十社も面接を受けていくのが現在の典型的な就職活動のあり方となっている。それは女性に葛藤や模索を求めるといよりも、突き進まざるを得ない、もしくは決定したところに傾倒せざるを得ない、ということを促進しやすいのではないかと想像する。

②価値観について

価値観については96%がFと評定された。これは、先行研究とは大きく違い、興味深い結果である。予備調査①の結果からも類推できるように、本学ではひとつの宗教を信仰する者が多いこと、現代の若者が価値を模索するという機会が少ないということが、このような結果の主な理由として考えられるであろう。

(2) 基準志向型の類型について

基準志向型は全体において、8人(31%)見られた。基準志向型の特徴は「規範や周囲からの期待によって葛藤を解決する」であったが、面接を進めていくと、葛藤を解決する際、この「規範や周囲からの期待」を現実に合わせて調節している者とそのまま受け入れている者に特徴が分かれた。そこで、前者を基準調節志向型、後者を従来の基準志向型とし、基準志向型におけるタイプを二分することが可能かと思われた。

基準調節志向型は、「規範や周囲からの期待によって葛藤を解決する」ことは基準志向型と変わらないが、より自らの規範を現実に合わせて調節したり、解釈を変えて対処したりしている。そして探索志向型のように葛藤を対象化したり、自己像のとらえ直しをるところまでいっていないところが特徴的である。試しに基準調節志向型を類型にとり入れ、基準志向型全員(8名)の再度評定を試みたところ、基準志向型6名、基準調節型2名であった。

表9：基準調節志向型の発話例

特徴	発話例
基準の調節	それまで本当にこんなんでいいんですかね。恋愛しているとやっぱり学業にさしさわりがあるからみたいな、してはいけないみたいなの考え方を持ってたんですけど、そういう風に思ってたんですけど、でもしょうがないことだと思ってそれを自分でコントロールできるようにならないとって思いました。甘えたりさみしがったりするのをコントロールできるようになればいい、みたいな、でバランスをとれるようになりたいって

上記の例では、恋愛によって勉強がおろそかになってはいけないという価値観は変わらないが、「コントロールできればいい」と新たな調節的な目標を設定し、本人なりに対処していることが伺える。基準志向型が、自らの規範や周りの期待に合うか合わないかという白黒的な葛藤の解決の葛藤を目指しているのとは違うことがわかる。

しかし、基準志向型との明らかな独立性とまでは明示できないこと、本質的には「規範を重んずる」

特徴は違わないため、集計表においては基準志向型の中にも含めることとし、F群においてなぜ基準調節志向型と思われるものが見られたのかについて考察を後述する。

(3) F群と葛藤対処様式との関連について

次にアイデンティティステータスと葛藤対処様式の関連について考察する。今回の調査ではA群が存在しなかったこと、D群がわずかであったことから、考察においてはF群、M群についてのみ検討していく。

①F群と葛藤対処様式との関連について

まず、表面的な人間関係をとりやすいと言われるF群の彼女たちにおいても、葛藤を感じた経験があると答えたものが11名(60%)いた。これはM群の8割が葛藤を経験していたことに比べると少なくはあるが、葛藤を回避しやすいと思われるF群にとっても、恋愛関係は他の関係よりも予測がつきにくく、葛藤が生じやすく向き合わざるをえなかったのではないかとと思われる。

〈自己内葛藤ありのグループ〉

F群において最も多く見られた葛藤対処様式は基準志向型である(8名)。これは、F群全体の自己内葛藤対処様式の44%を占める程度であるが、「葛藤が存在しない」と答えた6名を除き、「葛藤が存在する」と答えた者の中での割合を見ると、66.7%と高い割合を示していた。これは基準志向型が葛藤を認めた際のF群における対処様式の特徴を示唆している可能性があり、「F群においては、葛藤があるものは対処スタイルとして基準志向型のスタイルをとる」という仮説を支持するものである。

F群に基準志向型が多かった理由として、「権威に弱く、自分の判断で事を決めるよりは、その世界での権威者の判断をあおぎたがり、それを鵜呑みにする傾向がある」F群の特徴がそのまま葛藤対処に現れたといえよう。

Marcia³⁷⁾はF群のパーソナリティの特徴として、ある種の固さがあると述べている。F群の彼女たちにとって、恋愛における自己内葛藤は、Marciaの言う「価値観がうまく機能しないような状況」にさらされた経験であると考えられる。そのような場合において、F群の彼女たちは「うまく機能しない価値観」を省みることはなく、もし内省がみられたとしても、「うまく機能しない自分自身」を批判的に省みるというものであった。(F群の葛藤あり群において批判的な自己分析が行われたものは12人中4名)つまりF群においては恋愛の自己内葛藤においても優先順位はあくまで自らの規範であり、恋愛関係により新しい感情や経験が生じたとしても、彼女たちにとってそれは「脅威」と判断され規範にあう自己イメージをもう一度取り戻すことが目下の命題として「名誉挽回の努力」を行いやすい傾向が伺えた。

それはほとんどが「固い」目標設定を持つものであったが、今回、F群における基準志向型において、前節で述べたように、中には葛藤解決において規範や他者の基準の採用しながらも現実にはいわば基準を柔軟に調節する「基準調節志向型」も数名見られた。これはMarcia³⁸⁾などによって指摘されているF群の特徴の、「両親の価値観を無批判に継承し、防衛的で固い性格」の者がとる対処というもの

と若干異なる印象を受ける。

これに関して北村³⁹⁾は、Marciaが述べるような意味でのF（固いF）の他に、社会一般の価値観を抵抗なく取り入れ、健康的で快活なF（柔軟なF）が最近見られることを指摘している。今回、F群において、基準調節志向型の葛藤対処をとったものが2名いたが、それらは北村のいう柔軟なF群と見なすことのできる可能性がある。これらのアイデンティティ・ステータスの面接記録を検討してみると、2人は進路選択に「固さ・一貫性」よりも、杉原⁴⁰⁾のいうような「社会的是認」ということに重点を置いており、自分が何がしたいかというよりも、どういことをすれば社会でうまくやっっていけるかという視点が強く見受けられた。彼女たちはMのような模索期間を経ていないが、北村の言うように、社会適応的で健康的な印象であった。

また、F群の中には、問題や葛藤に直面することを避け、状況が行為の方向性を要求するまで決定を遅らせようとする曖昧型が2人いた。F群においてみられた曖昧型は、表10からわかるように、F群の中でも、特に葛藤の内容が、自分の手に負えない種類のもの、特に、どうしようもできない恋愛特有の「感情」の葛藤（No1, 6）が語られた2人であ

表10: 葛藤がみられたF群の対処スタイルと葛藤内容

No	対処スタイル	葛藤の内容
1	曖昧	恋愛感情の冷め
6	曖昧	嫉妬を抑えれない
2	基準	諸活動との両立
4	基準	諸活動との両立
5	基準	諸活動との両立
21	基準	以前の交際相手の友達と付き合い
23	基準	相手の考えに影響される
20	基準	諸活動との両立
9	基準	自己主張できない
12	基準	部活内における恋愛
3	基準	諸活動との両立
17	探索	嫉妬を抑えれない

った。感情を含む葛藤に対して、これらの2人は、「規範に合うように、自己イメージを取り戻す努力」も逆に「感情の受け止め」も行えず、状況の変化以外の対処が望めない様相であった。

諸活動とデートの両立（No2, 3, 4, 5, 20）など、「規範と相反する行動」の葛藤に対しては、持ち前の特徴を発揮し、基準志向的に対処していくが、葛藤のテーマが「規範と相反する感情」になると、状況の変化以外に頼るべきところがない様子に見受けられた。それはF群というのが、「親や社会が何を望んでいるか」ということへの重みづけが強いため、「何かを感じたり望んでいる自分」に対しての取り扱いに不慣れで、自己の感情対処が難しくなりやすいことと関連しているのではないだろうか。

また、F群において、仮説とは矛盾する探索志向型が1名（11%）見られた。これはネガティブサンプルとして興味深い。F群においても探索志向型であったこの1名は、F群の中でも唯一過去にカウンセリングを一定期間利用していたものであった。カウンセリングという、いわば他者を利用しながら、自分と向き合っていくという経験が、認知スタイルに変化を及ぼし、F群においても葛藤の対処において探索志向型になりえたことと関係しているのではないだろうか。

〈自己内葛藤なしのグループ〉

F群において、葛藤が自分には（未来においても）存在しないと断言する否認志向型は3名（17%）見られ、全体の否認志向型のほとんどを占めていた。

これは「否認志向型を取るものはF群に多く見られるだろう」という仮説を一応支持するような結果となった。

これは、Marciaの初期の研究⁴¹⁾においてもF群はA群に比べ、自己評価が否定的な情報に接すると揺らぎやすいということが言われており、否認志向の対処はその揺らぎから生ずる不安に対してF群が取りうる防衛かもしれないと思われる。面接においてもポジティブな経験が多く語られ、（良い影響を受けた等）自分にとって苦痛となるようなネガティブな経験は相対的に語られない印象を受けた。

（4）M群と葛藤対処様式との関連について

6人のM群の女性は、葛藤対処様式において、探索志向型をとるものがほとんどであった（5人、83%）。これは「M群は、葛藤対処様式において探索志向型をとるものが多いだろう」という仮説を支持するものであるといえよう。

M群とは、現在人生における重要な意志決定において主体的な選択をしようと奮闘（今回は主に職業）しているものである。恋愛関係の自己内葛藤に対しても、問題を対象化し、距離をおくスタイルをとったのだと思われる。

Berzonskyの先行研究⁴²⁾⁴³⁾においても、今回の探索志向型に相当する情報志向型（自分が取り組んでいる問題に関する情報を積極的に探索し、明細化し、評価する）は、アイデンティティ・ステータスのA・M群と関連が高く、コーピングのスタイルにおいては、問題焦点型のスタイルをとると言われている。本研究もBerzonskyの先行研究を支持する結果となり、女性においても、M群の認知処理能力の高さを裏付けるような結果となったと思われる。

また、M群に曖昧型の存在も見られなかった。これはM群の人生の課題に対する積極的な姿勢を示すものではないだろうか。

さらに、M群では否認志向型の存在もみられなかった。否認志向型は、そもそも他者からの影響を自分が受けることはありえないし、関係によって自分が揺らぐことはありえない、という認識を持つものである。M群は自分の内面に関心を持ち積極的に探索する姿勢、葛藤を受け入れることのできる自我の強さがあるため、否認志向のスタイルの者が存在しなかったという可能性が考えられよう。

VI. 総合考察および展望

前節において、アイデンティティ・ステータスと恋愛葛藤対処様式の関連における主な論点を述べた。最後に、各ステータスの葛藤対処様式の結果の違いがどういった意味を持つのかを特に取り上げ全体的な考察を試みる。

1. 総合考察

(1) アイデンティティの形成と恋愛関係における自己内葛藤との関連

アイデンティティの形成という課題に対して主体的に重要な自己決定をしようと模索している者、つまりM群は、恋愛関係における自己内葛藤を自己の視点を生み出したり自己イメージを再検討することに使っていた。

一方で、自らの重要な自己定義を模索期間を経ずに決定している者、つまりF群は、恋愛関係における自己内葛藤によって自己の視点を再評価したり、自己イメージの再検討に使ったりすることはしなかった。アイデンティティの形成というのは、問題で先に述べたように、心理・社会的な側面において、幼少期からの自らの自己定義を模索を通してもう一度主体的に自己決定し確立していくプロセスだと言われている。そうであるならば、自己の視点や自己イメージの再評価はアイデンティティの形成のプロセスを促す要因であるといえる。

今回、自らのアイデンティティを模索しているM群の女性が、関係における自己内葛藤を、自己の視点の再評価に使っていたことは、次のようなことを表わしているのではないか。

つまり、恋愛関係における自己内葛藤はアイデンティティを模索している者にとっては否定的なものではなく、アイデンティティ達成のプロセスに寄与する可能性があるのではないだろうか、ということである。

(2) M群における葛藤体験の自己評価からの検討

アイデンティティ達成のプロセスと恋愛関係における自己内葛藤対処様式の関連をより深く検討するためには、M群の女性に着目してみると興味深い。EriksonはアイデンティティはD若しくはFからM、更にAへと徐々に形成されるという発達図式を描いていたのであるが、それはあくまで男子青年をモデルとしてつくられている。問題2の(2)で先行研究の概観で述べたように、女性においてはMからAへと一律的にアイデンティティの達成がなされるのかという点では論が分かれている。女性にとってのM、つまり危機を体験することは、男性とは違い適応的でなく(自尊感情・自己肯定感の低さなど)、女性のパーソナリティ機能に対しては消極的な意味をもつと考えられ、逆にFがAと同じような高いパフォーマンスを示すのではと言われたこともある。Orlofsky⁴⁴⁾は、「同一性危機は男性と同様、女性においても人格の分化や内的準拠性の発達を促すが、女性では同一性危機を通過することに社会的支持が得にくく、葛藤に満ちているのではないだろうか。」と女性が葛藤や危機を体験することの難しさを述べている。

しかし、現代の女子青年にとって、危機とはどのような意味があるのか、またMとはどのような特質があるのかということは今ひとつ明らかにされていない。今回質問紙等を取り入れるような試みは行っておらず、一般的な傾向の把握はできていないが、それに代わるものとして葛藤経験がM群の女性にとってどのような経験であったか、またM群の女性の特質とはどのようなものなのか、これらについて恋愛関係における自己内葛藤の彼女たちの語りから考察しよう。

表11：M群の葛藤経験の自己評価

ステイタス	葛藤経験の自己評価の発話例
M	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>良かった気がする。なんか恋愛とか・・・特にあんまり人にいいたくないような部分、のようなところで自分がこうやって葛藤できたりしたのって、すごいみんなもありそんなことで、人に言えないところですから。自分が少し柔らかい自分になったかなと。</u> ・ <u>すごく相手につきはなされて、動揺する自分に正直びっくりしました。こんな自分弱いと思いましたから。(中略)でも心の痛みというのはいしょうがないし、経験してればまわりで悩むこのためにも痛みがわかるというのはありがたいことだと思います。悩んだときに違う価値観を生んでもらったことがありましたかね。なんででしょう。責任感かな。</u> ・ <u>不安になったときに、その人に依存するっていう自分を・・・なんかやだなーっていうのを思いました。(中略)でも付き合うのってどういうこと？っていうのを思ったりして、やっぱりそういうのは自分にとって特別な人だから、その一・・・<u>順調な時だけ好きだからっていうのじゃなくて、大変なときも一緒にいる、いるっていうか支えあう・・・ために・・・いるんじゃないかなって。そういうためだけじゃないとは思うけど・・・。そういうためにいるんじゃないかなって思いはじめて、ただこう、逆に最近とかだと向こうがこう落ち込んで、元気がなくて、なんか支えてあげたいなってすごい思うっていうか・・・一人じゃないとか、自分を、自分のことを他人なのに自分のことを考えてくれる人がいるっていうのは、やっぱりそこでも実感できたというか・・・そういう風に思えるようになったからよかったなーとは。</u></u> ・ <u>よかったですね・・・私的に。柔軟に生きれるようになった。うん・・・ま、すべてに対してですけど、恋愛に対してもそうだし・・・だいぶ考えられるように・・・楽になりましたね・・・柔軟に考えれるようになって。楽になった。彼にとっても良かったんじゃないかな。<u>お互いやっぱり甘えるときは甘えていいんだなって。(中略)一緒に生きていくうえでですかね・・・それが・・・変わりましたね。そんなこと考えてなかったですからね(笑)(中略)あ、こうやって二人で生きていくんだって思って。じゃないと二人で生きていけないんだなーって思ったんですね。結婚したら特にそうだって。今までたぶんお互いが立ってたし、うん・・・ま彼がどう考えてたかわかんないですけど、ほんとになんか愚痴をこぼさないし弱みも見せないし、そんなに・・・それが大きく変わってしまいましたね。</u></u>

M群は、面接過程で「この対処の仕方や経験は自分にとって良かったと思いますか」という質問に対して、全員が葛藤経験を肯定的に自己評価していた(5人中5人)。また、葛藤に関してもほぼ全員(5人中4人)がなんらかの形で解決、解消していた。

面接内容からさらに検討すると、表11に例示したように、M群の女性は、恋愛関係によって揺り動かされる自分、変化する自分を認めているように思える。

これは自己認識力(自分の中にある情動や感情を自分でわかるということ一杉村⁴⁵⁾)は自己認識の発達において他者とのかかわりで起こったことを分析したり検討することや、そこでの感情を適切に処

理することはきわめて重要であると述べている。)の高さともいえるし、カウンセリングの言葉を借りれば、「自己概念(自分自身に対して抱いている概念やイメージ⁴⁶⁾)」と「経験」が一致している状態であるといえよう。上記の例でいうと、今までになかった、甘えてしまう自分を否認することなく、認め自分の一面として受け入れているなどをここでは指摘したい。

上記の例のようにM群は、恋愛関係における葛藤経験によって、「固い思い込み」や「観念」に縛られ、自己不一致におちいり身動きがとれなくなるようなことはなかった。それは、自らが刻々と経験していることを受け入れる力、先ほど述べたように自己概念と経験を一致させることができたからこそ、自らの葛藤体験を抱え込まず解決に導くことができたのではないだろうか。この点についてはM群の女性の特質を表している可能性があり、今後さらに人数を増やし、より精密に検討していく必要があると思われる。

無論、その他F群に特徴的であった基準志向型においても、肯定的な変化が見られたものはいたが、F群は、規範的な目標を新たに持ったりできないものは、葛藤経験を否定的に評価しており、状況何によっては葛藤経験の評価が揺れ動きそうな印象を受けた。

今回、本研究において対象となったM群の女性は、少なくとも面接時点では恋愛における自己内葛藤を肯定的に評価していることがわかった。印象の範囲を超えることはできないものの、M群の女性が葛藤経験を自我の形成にプラスにとらえている可能性があるといえるのではないだろうか。

以上、考察をまとめると、①恋愛関係において自己内で葛藤経験をしているものが少なくないこと、②多くのM群の女性が、関係における自己内葛藤を、自己の視点の再評価や自己イメージの再検討に使っていること、③M群の女性において葛藤経験を肯定的に自己評価している者が多いことから、女子青年のアイデンティティの形成にとって、重要な他者との関係は関連が深いものであること、さらに自己内葛藤の対処の仕方がそれと大きく関係しそうなことが示唆されたといえる。

2. 展望

今回、被験者の少なさ、ステータスの偏りが、アイデンティティ・ステータスと自己内葛藤の関連を検討することにおいて説得性を欠落させた要因と思われる。

恋愛関係における自己内葛藤とアイデンティティ達成のプロセスとの関連をより深く考察するためにはアイデンティティ・ステータスのA群やM群をさらに増やして検討する必要があるだろう。サンプリングについてはいっそうの工夫が求められる。

今後、重要な他者との関係における自己内葛藤の経験とアイデンティティ・ステータスとの関連を研究していくことで、女性にとってのアイデンティティの形成において重要な他者との自己内葛藤経験がどのように利用されているのかがより明確になるとと思われる。それは、自己決定が困難になりやすい現代に、葛藤を経験している女子青年への心理臨床を考える上でも大いに有益であると思われる。

また、本調査におけるアイデンティティ・ステータスの評定が、質問紙による本学女子学生の母集

団を表す結果と大きく異なったことは、加藤の質問紙における信頼性を再検討する必要性を意味していると言えよう。さらに、評定においてF群が非常に多かったこと、A群がみあたらなかったことは本学の女子学生の特色を表す可能性が大きく、この点についても今後さらなる検討が必要であると言える。

(紙面の都合上、予備調査や、本調査における面接調査の評定方法・質問内容を大幅に省略しているが、詳しく知りたい方は2004年度文学研究科教育学専攻の修士論文(創価大学図書館所蔵)を参照していただくと幸甚である。)

末尾ではあるが、本稿の執筆に当たって、多くの方の協力・御指導を頂いたことに深く御礼申し上げます。とりわけ、快く調査に協力して下さった被面接者の方々、園田雅代教授の御指導なしには進めることはできなかつた。深く感謝の意を表明したい。

注

- ¹⁾岡本裕子 1999 アイデンティティ(identity)氏原 寛 他(編) カウンセリング辞典 ミネルヴァ書房 pp. 5-7.
- ²⁾無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- ³⁾Erikson, E. H. 1950 (2nd enlarged ed. 1963) *Childhood and society*. New York: Norton. 仁科弥生(訳) 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房
- ⁴⁾山本 力 1984 アイデンティティ理論との対話 鐘幹八郎 他(編) アイデンティティ研究の展望 I ナカニシヤ出版 pp. 9-36.
- ⁵⁾福島 章 1999 日本人のアイデンティティ 鐘幹八郎 他(編) アイデンティティ 日本評論社 pp. 1-11.
- ⁶⁾Gruen, W. 1960 Rejection of false Information about Onself as an Indication of Ego Identity. *J. of Consulting Psychology*. 24, 231-233. /Block, J. 1961 Ego Identity, role variability, and adjustment, *J. of Consulting Psychology*. 25, 392-397.
- ⁷⁾Rasmussen, J. E. 1964 The Relationship of Ego Identity to Psychosocial effectiveness.
- ⁸⁾無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, 27, 178-187.
- ⁹⁾Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 551-558. 1998 鐘 幹八郎(編)「アイデンティティ・ステイタス」の開発と確定 アイデンティティ研究の展望 5-1 ナカニシヤ出版
- ¹⁰⁾Adams, G. R., Ryan, J. H., Hoffman, J. J., Dobson, W. R., & Nielsen, E. C. 1985 Ego identity status, conformity behavior, and personality in late adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1091-1104.
- ¹¹⁾Erikson, E. H. 1950 (2nd enlarged ed. 1963) *Childhood and society*. New York: Norton. 仁科弥生(訳) 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房
- ¹²⁾9)と同
- ¹³⁾杉村和美 1999 現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達 岡本祐子(編) 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路書房, pp. 55-86.
- ¹⁴⁾杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9(1), 45-55.
- ¹⁵⁾永田彰子 2002 関係性から見た生涯発達—アイデンティティを育てる土壌としての「関係性」— 岡本祐子(編) アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 pp. 121-147.
- ¹⁶⁾無藤清子 1995 青年期における心理臨床の問題 無藤 隆(編)自己への問い直し 金子書房 pp. 221-248.

- 17) Newman, B. M., & Newman, P. R. 1984 *Development through life : Third edition* 福富護 (訳) 1988 新版 生涯発達心理学 川島書店
- 18) 宮下一博 1995 青年期の同世代関係 自己への問い直し 講座生涯発達心理学, 4, 155-184.
- 19) 富重健一 1998 異性交際への不安—青年期を中心に 現代のエスプリ, 368, 52-62.
- 20) Erikson, E. H. 1950 (2nd enlarged ed. 1963) *Childhood and society* . New York : Norton. 仁科弥生 (訳) 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房
- 21) Orlofsky, J. L., Marcia, J. E. & Lesser, I. M. 1973 Ego identity status and intimacy vs isolation of young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 211-219. 1998 鎌 幹八郎 (編) 成人初期におけるアイデンティティ・ステータスと親密性対孤立の危機 アイデンティティ研究の展望 5-1 ナカニシヤ出版
- 22) Hodgson, J. W., & Fischer, J. L. 1979 Sex differences in Identity and intimacy development in college youth. *Journal of Youth and Adolescence*, 8, 37-50. 1998 鎌 幹八郎 (編) 大学生のアイデンティティと親密性の発達における性差 アイデンティティ研究の展望 5-1 ナカニシヤ出版
- 23) Josselson, R. L. 1973 Psychodynamic aspects of identity formation in college women. *Journal of Youth and Adolescence*, 2, 3-52.
- 24) 芳川玲子・園田雅代 1985 女子大学生の自我同一性・親密性< I >情緒的共感性・親密性尺度における自我同一性地位群間比較 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 56-57. /高橋裕行 1988 同一性と親密性の危機の解決における性差—自我同一性地位のRasmussenのEISによる併存的妥当性の検討— 教育心理学研究, 36, 210-219.
- 25) 日本性教育協会 (編) 1999 「若者の性」白書—第5回・青少年の性行動全国調査報告—
- 26) 15) と同
- 27) 中島義明 他 (編) 1999 心理学辞典, 有斐閣
- 28) Berzonsky, M. D. 1989 Identity style : Conceptualization and measurement. *Journal of Adolescent Research*, 4, 268-282.
- 29) 山口智子 2000 高齢者の人生の語りにおける類型化の試み—回想についての基礎的研究として 心理臨床学研究, 18(2), 151-161.
- 30) 28) と同
- 31) 28) と同
- 32) 問題の延期には、志向的なもの (積極的、主体的に選択するあきらめ等) もあるが、今回それは含めていないため、「志向」という言葉は除いている。
- 33) 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 34) 33) と同
- 35) 鈴木淳子 2002 調査的面接の技法 ナカニシヤ出版, pp. 21-40.
- 36) 9月までの授業での公募による面接調査の問題として、1) 対象者のアイデンティティ・ステータスの群にやや偏りがみられた。2) 学年の傾向なのか、職業における早期完了群 (F) が目立った。少しでも多様な群に面接が試行出来たほうが良いと考え、10月以降の対象者には理論的サンプリングとして以下の手法を加えている。面接項目は変えずに1) 対象者を3, 4年生に絞り、2) 加藤 (1983) の自我同一性地位尺度 (12項目) (本稿の最後に資料添付) を授業等で配布し、被面接者のおおよそステータスのあたりを事前につけることにした。回収された質問紙の中からステータスを選別後、面接を依頼している。(10月以降の対象者は16名) しかし、それだけでは、目的人数に満たなかったため、その他スノーボール・サンプリング (snowball sampling) : 対象者に選択基準を提示して目的に合った人を紹介してもらい、も併せて実施している。
- 37) 9) と同
- 38) 9) と同
- 39) 北村英哉 1983 現代日本における自我同一性の特徴—早期完了群を手がかりにして—東京大学教育学部心理教育相談室紀要, 6, 143-151.
- 40) 杉原保史 2001 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について 心理臨床学研究, 19(3), 266-277.
- 41) 9) と同
- 42) 28) と同
- 43) Berzonsky, M. D. 1992 Identity Style and Coping strategies」 *Journal of Personality*, 60, 771-788.

44) Orlofsky, J. L. 1978 Identity formation, achievement, and fear of success in college men and women. *Journal of Youth and Adolescent*. 7, 49-62.

45) 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成:関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9(1), 45-55.

46) 平木典子 1997 臨床心理学の理論と技法 平木典子(編) カウンセリングの基礎 北樹出版, pp. 129-205.

<参考文献>

荒井真太郎 2001 大学生における自己, 親, 友人, 好きな異性への準拠のあり方について—自我同一性との関連, および性差の検討 家族心理学研究(日本家族心理学会), 15(2), 93-107.

Grotvant, H. D. 他1982 An Extension of Marcia's Identity Status Interview into the Interpersonal Dominan. *Journal of Youth and Adolescence*, 11, 33-47, 鐘 幹八郎(編) 1998 Marciaのアイデンティティ・ステータス面接の対人関係領域への拡大 アイデンティティ研究の展望5-1 ナカニシヤ出版

石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人的関係性 教育心理学研究, 42(2) 118-128.

伊藤美奈子 1999 現代青年における同一性と親密性との関連について 心理学評論, 42(1), 35-41.

伊藤裕子 2000 ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房

柏木恵子 他(編) 1995 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房

三好智子 2001 "個"- "集団" 間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性の形成過程 心理学研究, 72(4), 298-306.

無藤清子 1987 自我同一性 児童心理学の進歩, 26, pp198-218. 無藤隆 他(編) 2004 質的心理学—創造的に活用するコツ 新曜社

無藤隆 他(編) 1990 発達心理学入門II 東京大学出版会

村瀬孝雄 1995 アイデンティティ論考 誠信書房

田村敏昭 2004 内的葛藤を失った現代青年—臨床事例からの理解 総合人間科学, 4, 17-26.

鐘幹八郎 他(編) 1984 アイデンティティ研究の展望I ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 他(編) 1995 アイデンティティ研究の展望II ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 他(編) 1995 アイデンティティ研究の展望III ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 他(編) 1997 アイデンティティ研究の展望IV ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 他(編) 1998 アイデンティティ研究の展望V-① ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 他(編) 1999 アイデンティティ研究の展望V-② ナカニシヤ出版

鐘幹八郎 他(編) 2002 アイデンティティ研究の展望VI ナカニシヤ出版

藤巻あゆみ 1995 女子大学生の自我同一性と対人関係 母子研究, 16, 117-125.

返田健; 大井修三; 鈴木壮 1995 大学生の自我同一性に関する研究—4—10年前の学生との比較 岐阜大学教養部研究報告(岐阜大学教養部), 32, 11-28.

高橋裕行 1990 「親密性地位」の検討と同一性地位と親密性地位との連関における性差の検討 教育心理学研究, 38, 240-250.

辻井正次 1994 大学1年生の発達課題への対処と自我同一性感覚—半構造化面接による検討 聖徳学園岐阜教育大学紀要, 第28集, 233-260.